

テレビ・コマーシャルにでてくる電子図書館

浜松分館長 石 井 仁

いきなりテレビの話で気は引けるのですが、最近次のようなコマーシャルが流れていたのに気づかれたでしょうか。農場とおぼしき場所を背景に、お年寄りとその孫娘と思われる人々が歩きながら次のような会話を交わしているのです。「例の博士論文やっと仕上げたよ。」「やったね、おじいちゃん。」「資料はインディアナ大学で調べたんだ。」「インディアナ?」「ああ、そうとも、XYZ（スポンサーの会社名）がその大学図書館の本をデジタル化してしまった。それでわたしもインターネットでアクセス出来たんだ。いい時代になったなあ。」「セリフは多少違っているかもしれませんが、内容は以上のようなものです。

この話は正しく情報学部の合庭先生が図書館通信No.112で書かれている電子図書館の使われ方の一例を示しています。我が静岡大学附属図書館も、現在、浜松分館を中心に、このようなマルチメディア時代に対応できる図書館の将来像を検討しているところですので、様子を知りたく、早速インターネットでインディアナ大学にアクセスしてみました。メインキャンパスのブルーミントンには3万5千人の学生が学んでおり、蔵書数550万冊の歴史ある大きな大学であることなど、色々と面白い情報がカラフルな画面と共にたちどころに入手出来、時間を忘れたほどでした。しかし図書館ページのあちらこちらを見ても、電子図書館らしき記述はなかなか探せません。あれやこれやと道草を喰いながらやっと目指すものが音楽関係の図書館で見つかりました。デジタル化した楽譜や、CD並みの音質でオーディオ・ソフトや音楽ビデオ・ソフトなどが、このキャンパスあるいは他キャンパスにある数百台のワークステーションからアクセス出来る大規模なマルチメディア対応プロジェクト”VARIATIONS”のことを指していたのです。テレビ画面の背景とセリフから、”インディアナ大学では自然科学に関連した既存図書も電子化した”と思い込んでしまったために調査した訳ですが、本というのはどうも楽譜のことだったようです。あのお年寄りは音楽関係の研究をしていたのでしょうか？

コマーシャルの内容についての詮索はともかく、何れの分野でも研究論文をまとめるには文献調査が欠かせません。理系では特に最新の文献についての調査を必要とします。研究というものを始めた約30年前の自分の経験を思い起こせば、写真以外に手軽な複写方法はありませんでし

た。最新文献が入る度に図書館に行っては、ノートに手書きで論文を写したものです。今のように先ずコピーして後で読むのではなく、読みながら手で書くという動作を伴っていました。年齢による記憶力の衰えを考慮しても頭への入り具合は当時の方が良かったように思います。さらに最近では、CD-ROM化された学術雑誌や出版物も増して、電子図書の時代が間もなく来るように見えます。これからは図書館に行かなくてもパソコンからのアクセスが可能となり、文献調査のスタイルも変わって行くでしょう。図書館も、今までとは根本的に異なるサービス提供しなければ利用されなくなる時代になりそうです。しかし、そうなればなるほど図書館で美術の本などのページをパラパラめくり一時を過ごすといった心に潤いを与える時間の必要性が、今以上に増すでしょう。上記コマーシャルのセリフではありませんが「大変な時代になったなあ！」。

(図書館にもインターネット専用端末があります。是非、一度遊んでみて下さい。VARIATIONSの詳細は<http://www.music.indiana.edu/variations/>で得られます。)

(工学部・機械工学科) [tmhishi@eng.shizuoka.ac.jp]

WWW情報



◎左の絵は、シカゴのジョニー・レヴァインという人が、世界中のWWWのサーバーにアクセスし、1日1サイトを選び、そのサイトを批評を兼ねて紹介しているホームページにかかっているもの。

4年に1度しかない、この2月29日にここに到達し、この絵をクリックした人は我が静岡大学附属図書館のページがその紹介と批評の対象になっていることを発見したはず。(http://sashimi.wwa.com/~jayhawk/)

3月1日になると、次のサイトの紹介になってしまうが、この絵のしたにはprevious Librarian's Site du Jourなる文字列がありアンダーラインが引いてある。で、そこをクリックする。すると、過去の分も見ることができる、という仕掛けになっている。

ために、その2月分を見ると、ミシガン州立大学のAmerican Verse Project(<http://www.hti.umich.edu/english/amverse>)やアメリカ国勢調査局のMonthly Economic Indicator(<http://www.census.gov/ftp/pub/statab/indicator>)などを知ることができる。これは正に絵に書かれている文字の通り、図書館の利用者よりも職員のためのページであるといえる。これまでLibrary Journal等を読んで参考図書の情報を仕入れていたが、毎日このページを読むことによってその作業のWWW版ができるという訳だ。

(ちなみに、Library Journalでも、このほどWWWサイトのレビューが始まった)

◎本図書館の日本語版の方のホームページの下の方を見ると図書館職員が運用しているページというのを目に思う。その中のM氏が維持しているアニメーションに関するページがこの4月にアメリカで発行されるFILM & VIDEO ON INTERNET: the top 500 Sitesという本に掲載されることになった。M氏、それを知らせる出版元からの電子メールと共に送られてきたそのことを示すマークを、早速、自分のページに掲げた。

読書と教養と人生

附属図書館長 久 保 靖

工学部教官である私の研究室には大学院生と卒業研究の学部4年生合わせて八人前後の学生が常時おり、こうして若い人達と一緒に過ごせることは幸せと言わねばならない。彼らに論文を書かせるという義務さえなければであるが。私は彼らを通じて工学部学生の生態を知るのであるが彼らはコミックとパソコンが大好きである。コミックは浜松キャンパス生協書籍部に定番商品としてある。コミックとは言え蔑視はできず、私はビッグコミック・スピリッツ誌連載の“美味しんぼ”（作・雁屋哲）から、日本酒における純米酒、本醸造・吟醸・大吟醸酒の区別と、吟醸酒をエタノールで薄めれば淡麗辛口になるということを教わった。生協喫茶室エルムにはこういったコミック誌が常備されており、これは静岡キャンパスにはないことかも知れない。

本のベストセラーリストでは若い読者層のものが多く、若い人達の読書熱はなかなかのものと思わせるのであるが、ウチの学生達は研究室にある専門書とコミック以外に一体どんな読書をしているのだろうか。数年前の卒研学生であるが、研究室に出て来なくなったので学寮に見に行ったら、熱を出したとかで寝ていた。その折に彼の書棚を見たのだが、ずらり並べられてあるのはオートバイの雑誌ばかりで、教科書が申訳ばかりに隅のほうにあった。この種の趣味雑誌もまた生協書籍部に溢れているものである。この学生は必ずしも例外的な存在とは言えなそうである。彼はオートバイ部品メーカーに就職し、所を得て順調な様子である。

私はここで、コミックや趣味本もよいが大学生がそれだけでは困るよ、教養を高めるような読書も必要ではないかね、人生行路は平坦一直線とばかりはいかないよ、などとお説教をはじめようとは思っていない。必ずしも人生の成功者とは言えない私に、人に説教を垂れる資格などないのだ。また、読書する者は別に勧められなくてもするし、大学生の年齢になって読書の習慣のない者に勧めることは無駄である。何せ静岡大学には多様な学生が共存するのだから、多様な対応が必要だ。ただ、新入生達に、教養というのは教養教育で教えてもらえるもので、単位が取れば一丁上がり・・・ではないことだけは承知願わなくてはならないと思う。

今期（1～3月）のNHK人間大学で京都大学の竹内洋先生が“立身出世と日本人”という演題で講義されたが、面白い内容である上に私にとって甚だ啓蒙的であった。（テキストはまだ手に入るかも知れないから、TVで見られなかった方には読んで見られるようにお勧めしたい。）この中に旧制高等学校生の教養に関わる人間類型の分析がある。ここでいう教養は西欧の哲学・文学・歴史などの人文学の習得が主体をなすものである。それによれば、Ⅰ教養耽溺型、Ⅱ教養手段型、Ⅲ没教養型の三類型に分けることができ、実社会での適応性はⅠがまるで駄目で、Ⅲがよい。官庁など理屈が支配する組織においてはⅡである。・・・これは私が言うのではなくて、

竹内先生のご研究の結果である。（実は、先生の用いられている表現はもっと直截的で、Ⅰを人文インテリ、Ⅲを体育会系とされており、上記は私の翻案である。）Ⅱの典型人物として挙げられているのが岸信介元首相で、60年安保世代の私としては氏のことを誉めて言うのは癪であるが、実務家であるとともに形而上的世界も理解できたという。出世を極めるのはⅡ型で、Ⅲ型は用済みになれば肩を叩かれる可能性がある。さて、オートバイの方は大丈夫だろうか。

私の駄文はこれまでにして、口直しをかねて優れた先人が読書と教養と人生について書かれた言葉を伝えることにしたい。静大生には先生方の寄稿からなる“静大だより”が年4回ほど配られる。その第49号（昭和52年7月）に人文学部の松田禎二先生が“夏休みと読書—ギリシャの古典から”と題され、教養においてギリシャ古典のもつ意味を、サッポ—やアルキロコスの詩を挙げて説かれている。ギリシャ古典でこのような詩に出会えるのである。

夕星(ゆうづつ)は 輝く朝が八方に
散らしたものを みな もとへ連れかえす
羊をかえし 山羊をかえし
母の手に 子を連れかえす

この詩は私に、この地上生きとし生けるものに愛しさを覚えさせ、人間であることも悪くはないなど感じさせてくれる。先生はまた“教養は順境においては飾りであるが、逆境においては避難所である”というアリストテレスの言葉を教えて下さっている。心に教養という豊かな富をもつ者は、おのずからゆったりとして、たとえ苦しい境遇に落ちても取り乱すことなく過ごせると。先生のお勧めにもかかわらず、工学部というせわしないところに身を置く私は、残念ながらまだギリシャ古典を一つも読んでいない。定年後の楽しみとしたい。先生は今春定年退官される。

医師で歌人の上田三四二の随筆“病後の読書”に込められた気持は、若い人に解ってもらうのは難しいかも知れないが、死という人生の重い真実が関わる。結腸癌を患い手術のために入院を待つ三四二である。「片付け仕事のあいだ、資料の必要から私はしばしば書庫に入った。大した蔵書ではない。それでも60年を生きてきたのである。思い出の本があり、恩恵を受けた本がある。欲しくて買ったのに、そのままになっている本がある。何時かかならずと思いながら、何時まで生きるつもりなのか、買い込むばかりで雑事に追われ、読む暇を見出せないまま埃をかぶっている本が、どっさりある、かどうかそこは主観だが、そういう本がやたら目につき、本の方から切ない瞬きを返してくるかのようだった。」「仕事の欲もいまは捨てていた。わが甲羅に見合うだけの穴は掘ったというかすかな慰めさえそこにはあったと言おう。ただ、読まずして別れてゆく本にだけは、知ることなしに過ぎてゆく女への思いもかくやとばかり、あらぬ連想をさそう愛惜の念があった。」「読んで何に役立てようというのではない。私はただ知りたかった。世のすぐれた人達がどのように考え、どのように生き、身につけた知恵のかぎりをどのように表現しているのかを、味わいたかったのだ。」大手術から生還して、ほぼ1年が過ぎた。「読書はこれからである。そのこれからもいつまでつづいてくれるのか、まことはかない。けれどあの入院をひかえての日々、書庫にあって胸にひびいた愛惜の念をおもうと、一日は千金というもおろかである。」（日本エッセイストクラブ編 1986年度ベスト・エッセイ集 “母の加護” 文春文庫 所収）。三四二は1989年に没した。

新入生のための

図書館〈超〉利用法マニュアル

- 高校までの図書館と大学の図書館との違いに主眼をおいて新入生のために静岡大学附属図書館の利用法を説明したいと思う。とはいえ、これまであまり図書館を利用してこなかった在学生はもちろん、頻繁に利用している人にも、きっと役に立つ情報がふくまれている、はず。
- 表紙のタイトルの中にURLが書かれているように、本誌はWWWでも読むことができるようになっていて。WWWではハイパーリンクが張れるので、本稿はそれを意識して書かれている。くどい言い回しや、反対に舌たらずな表現があるとしたら、その影響である。インターネット上で読むことを、とくと希望する次第。

本が無い。

授業中に、先生がある本に目を通しておけ、という。図書館にあるはずだ、ではなく図書館にある、と断定していたが、図書館に行って書棚を見てもない。さらに目をさらにして捜すが無い。そこで端末の前に陣取り、検索すると「書架にあり」とある。ここで、もう一度目をさらにしてほしい。配架場所の確認である。似たような字でまことに申し訳ないと思っているのだが、開架か閉架かを見てほしい。

開架の本は8万冊弱、本図書館の全蔵書数の10分の1程度である。残りは閲覧室（4階と5階）の真下の3つの階を占めている書庫に置いてある。書庫（＝閉架）の本は、図書請求票に必要事項を記入して、カウンターに提出し館員にもってきてもらう、という手続をとることになる。

ライブラリー オリエンテーション のお知らせ／Part One

- 学部生は通常、書庫に入れませんが、この30分のライブラリー・ツアーでは、書庫の案内もします。

4月15日（月）～19日（金）

13:30～、15:30～／4F入口ゲート前から

参考図書を使いたおそう。

時たま投書箱に「軽い読み物類を入れてほしい」という要望が寄せられる。図書購入費が潤沢にあれば図書館側としても大いに揃えたい思っているところ（かく言う図書館職員の私も、ステイブ・キングや高村薫の新刊が出ると自分で買っている・・・図書館で買ってもらえれば嬉しい）。その辺は手薄だとしても、勉学に必要な本、特に調べものをするための本（通常、参考図書と呼ばれている）は、最優先で揃えているつもりである。

5階閲覧室の西側の壁に大版のグリーンの本がズラリと何百冊も並べられている。これは北米のウン百の図書館に所蔵されている本の総合目録で、印刷が発明されて以降の英語による出版物のデータがすべて収録されているといって過言ではない代物(National Union Catalogである)。当然きわめて高価なものだが、購入価格が数百万を超えるものは、これだけではなく、幾つもある。

ただし、高価であればあるほど対象とする範囲が広くなり、また収録方法が複雑になるので、それを使いこなすためには、多くの努力を必要とするようになる。基本的には利用者の自己努力を期待するものだが、判らないことがあれば、どしどし参考調査係に相談してほしい。大歓迎である。

まだまだ増えるぞ！？端末・パソコン・・・。

入口のゲート（このゲートの出口側を貸出し処理をしていない図書館資料を持って通過するとブザーが鳴るので、要注意！！）の左の方に、ズラリとパソコンらしきものが並んでいるのが目につくと思う。らしきもの、と書いたのには意味があって、一見同じようにように見えても、ここのものは、機能的にみて、大きく次の3つの異なるものが集められているからだ。入口に近い方から書くと、

- ①インターネット用
- ②本図書館の蔵書検索用（これは、ふたつに分かれる）
- ③CD-ROM検索用

である。理想的には、この3つが、特別な知識や訓練をせずに、しかも同じ対処の仕方で扱える実行環境になっているべきだが、現在の技術水準では残念ながら、そうもいかないし、それどころか大学や図書館を取り巻く環境を考えると、更に新たな取扱法が要求される端末等が増える、と思って間違い無い。

図書館職員の中にさえ、コンピュータ・アレルギーで、端末等の前に坐ると頭がこんがらがってしまう人の中で、利用者に知識や訓練を要望するのは、少々心苦しいが、やはり慣れていたたく他はないし、ファミコンの少々複雑なゲームを修得することに比べたら、ずっと易しい。もちろん、操作していて、分からないことがでてきたら、近くの図書館職員に尋ねてほしい。

ライブラリー オリエンテーション のお知らせ／part Two

- 各種の端末等の機能とその操作法を案内します。
（静岡大学所蔵図書・雑誌の検索法とインターネットへのアクセス）

4月22日（月）～26日（金）

13:30～16:00 随時／4F 検索コーナー

インターネットで、世界へ・・・

入口ゲートに一番近いところの6台が、インターネット専用の端末で、通常は本図書館のホームページになっている。ここでは、当然、本図書館の蔵書検索や利用案内、そして本通信（No. 111以降を収録）をクリックひとつで見ることが出来るが、この画面の下の方には、大学の図書館の利用者に有用だと思われるサーチエンジン（インターネット上の膨大なデータに簡単に近づけるようにと準備されている検索システム）等にリンクを張ってあるので、ぜひ試してみてください。時々、これが英語版であることにクレームをつけてくる利用者がいるが、第一に大学の図書

館であること、次いで、ごく最近でこそ日本語によるサーバーが増えたが、それでもインターネット上に公開されているデータの質・量ともに彼我の差は大きいからである。

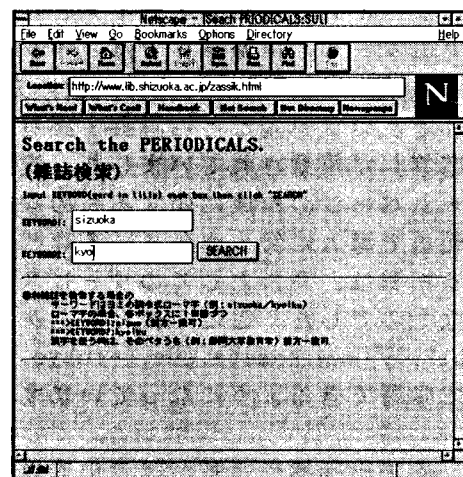
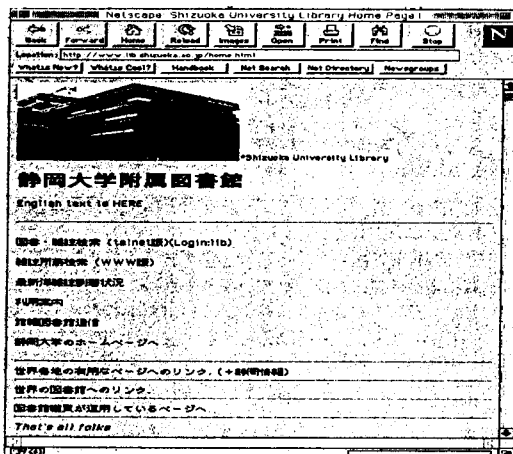
例えば、静岡県で公開されているサーバーについてのホームページでは、清水市在住のMartyn Williams氏が、アメリカのサーバーから発信しているものが、シンプルではあるが、含んでいる内容としては、もっとも充実している(<http://www.twics.com/~MARTYN/shizuoka.html>)。当然のこととして、本図書館のホームページからもリンクしている。それに引替え、某電話会社の静岡支店の同様なページは、色々な絵を使って飾りたててはいるものの、その内容は信じられないほど貧しい。

本学の蔵書検索は、ふたつのものがある。

インターネット用端末のすぐうしろでグリーンの画面を見せている端末が、本図書館のメインシステムによる蔵書検索のためのもの。(すべての)雑誌と1988年度以降に受入れされた図書の検索ができる(それ以前の図書は、入口ゲートの外、正面玄関と西側入口とに挟まれた一角に置かれているカード目録で調べる。ただし、こちらの分も、現在、コンピュータ検索を可能にすべく、データ入力作業を進めている)。

この検索システム、なかなかの優れものだが、これはクローズド・システムというべきもので(図書館外からのアクセスも不可能ではないが、コスト・パフォーマンスからすると非現実的である)、学内の各研究室からもアクセスできるようにと情報処理センターにデータを移し、もうひとつの検索を公開している。これは学内だけではなく、学外、さらには海外からのアクセスも可能である。ということは、前記のインターネット用端末でも見ることができる。

どちらを使うかは、利用者の判断に任せられる。



ライブラリー オリエンテーション のお知らせ／Part 3

- CD-ROM版およびフロッピー版データベースの利用法
(国会図書館蔵書目録、朝日新聞記事全文、カレント・コンテンツ等)

5月13日(月)～17日(金)

13:30～16:00 随時／4F 検索コーナー

「インターネット講習会（国立大学図書館協議会主催）」参加報告

情報サービス課参考調査係長 畠山百合子

国立大学図書館協議会主催のインターネット講習会が、12月6・7日の2日間、学術情報センターを会場として開催されました。大学図書館におけるインターネットの重要性が急速に高まる中、国立大学図書館職員を対象として初めて開かれたもので、参加希望は全国から多数集まり、遠方から順番に選ばれたという33名中の一人として貴重な講義を受けることができました。

この講習会は、国立大学図書館協議会の下「次期電算化システム専門委員会」（今後の中・長期の将来を見通した図書館電算化の方向づけの検討を目的として設置）により企画・実施されたものであり、講師も初めの戸田慎一東洋大助教授の「インターネットと大学図書館」以外は、専門委員会のメンバー（図書館の中堅職員で構成）によるものでした。講習会プログラムは講義、実習、自由実習と組まれており、現場で情報サービスに携わっている図書館職員により綿密に作成されたテキストのもとで、最新の知識の講義と实际的に身に付くように配慮された端末実習が、講師補助者の援助を得ながら行われました。

初めの「インターネットと大学図書館」では、情報サービス機関である大学図書館において、緊急を要する課題と考えられているインターネットの位置づけと、学術情報（メディア）の要件や収集・保存等からみた、インターネット上の情報と図書館で扱っている伝統的な情報との比較、及び情報サービスのためのメディアとしての問題点などが述べられました。次の講義「インターネット上のツールと情報源」では、インターネットの歴史とツールの概要が述べられ、1日目の午後からは「Mail, Telnet, Ftpの使い方」及び「Gopher, WWWとそれを使った情報資源の探し方」と、それぞれのツールごとに講義・実習があり、2日目には「課題及び自由実習」と「まとめ及び質疑応答」が用意されていました。質問には講義の中での疑問点と、現場におけるネットワークやホームページの作成に関するものなどがありましたが、一つずつ丁寧に回答して頂きました。

自ら職場で導入に努力されている専門委員会委員によるテキスト作成と講義、そして端末実習における指導は、業務としてのサービスを展開する立場に立たされている大学図書館員にとって有意義なものでした。ここで使われたテキストはHTML化され、インターネット上のホームページ（<http://www.komaba.ecc.u-tokyo.ac.jp/~ariadne>）でも公開されて、誰もがこのテキストを使って学習できるようになっています。

◎貸出図書の返却期限日の変更

2月21日（水）から4月6日（土）までに貸出した図書の返却期限は、4月15日（月）となります。

あなたの、 利用票ができています

■閲覧カウンターに学生証を提示して下さい。その場で発行します。

※学部生のみです。院生、研究生等は窓口にお問い合わせをして下さい。

